

お経を埋める

仏教の経典を書写し供養して、それを地中に埋納した場所を「きょうづつ経塚」と呼びます。経塚の造営は、1052年に末法の世が訪れるという末法思想が広がる中で、経典を後世に伝えようとして始まりました。その主な目的は、釈迦入滅後56億7000万年後に弥勒菩薩が下界に現れ、三会の説法を行う際に備えて経典を残そうとするものです。やがて経塚は、極楽往生・解脱・現世の幸福を望むなど阿弥陀信仰や追善供養を求めるなど、時代が下るにつれてその目的は純粋な仏法護持から自己本位なものへと変容していきました。

平安時代のはじめは天皇を中心とした律令制の時代でしたが、11世紀になると貴族による摂関政治から上皇を中心とした院政へと移り、政情が不安定になってきました。都では商業が発達したことで、富む人と貧しい人との格差が広がり、疫病の流行や地震・戦乱などの災禍が続きました。こういった時代背景の中で、貴族を中心に末法思想が広がり、盛んに経塚が作られました。

経塚の多くは丘陵高所に設けられることが多く、偶然の機会で見られることが多いものです。京都府北部の発掘調査例を見る



経塚検出状況（大道寺跡）

と、経塚は最初に縦方向に穴を掘り、さらに横方向に穴を掘り進めます。この横方向の穴に、経典を入れた金属製・土製・竹製の経筒を納めます。その経筒はさらに外容器である陶器に納める二重の構造になっています。外容器に石で加工し



銅製経筒（大道寺跡）

た底板に陶器の口縁部を下にして伏せたもの（京丹後市茶臼ヶ岳経塚など）、陶器を正位置に置き、別の容器を転用して蓋にしたものなどがあります。さらに丁寧なものでは、宮津市エノク古墓のように、横穴の入口部分に板石をおいて塞いだものも見つかっています。

納められた経典はその多くが紙に書かれたもので、長い歳月の中でほとんどが土に還り、残っていません。しかし幸い、福知山市大道寺跡の経塚では経典が残っていました。

大道寺跡の経塚は、丘陵上の中世火葬墓群の一画にあります。ここでは13世紀初頭頃の経塚1基を検出しました。経塚は一辺約1.3m、深さ約0.6mの縦方向の土坑の側面に横穴を穿ち、外容器・経筒が納められていました。外容器には、須恵質の甕と片口鉢を転用した蓋を使っていました。外容器の中には、銅製経筒1口と竹製経筒2口が納められており、銅製経筒1口から妙法蓮華経8巻と阿弥陀経1巻の一部が残っていました。経筒が銅製であったこと、外容器の中に土が入らなかったこと、発見時に雨水が入った状態であったことから現在まで経典が残っていたものと思われます。竹製の経筒にも経典があったのかもしれませんが、残っていませんでした。なお、竹製経筒は文献でのみ知られていましたが、実際の竹製経筒の出土は本例が初めてでした。



残っていた経典（大道寺跡）

（竹原一彦）